

清代における日本漢文學の受容

蔡 毅

論文要旨

本研究の主旨は、中國の日本漢文學に對する受容の状況を考察することである。

これまでの日中漢文學交流の研究は、大部分が中國古典文學の日本漢文學に對する影響を重視しており、歴史上少量の日本漢文學作品が中國に傳わり、様々な反響を呼んだという史實については、問題にされることが殆ど無かった。文學交流は雙方向に影響し合うという視点から出發し、この一種の「逆輸入」現象に検証を加えることは、中國古典文學研究と日本漢文學研究の中に含まれるべき課題だろう。唐代から明代までの時期については若干の史實にまだ更なる検証を要することから、本書は輪郭が概ねはっきりしている清代（おおよそ江戸、明治時代に相當する）に焦點を當て、日本漢文學、即ち漢詩や漢文の清代における流布の軌跡を尋ね、東アジア漢字文化圏の中のこうしたフィードバック現象が持つ文化的意義を明らかにしたい。

本書は序章、本論四章および終章から成る。序章ではこの主題を選んだ由來を説明する。本論の第一章、第二章は漢詩論であり、それぞれ江戸時代と明治時代の日本漢詩の清代における流布について検討する。第三章は漢文論であり、頼山陽の『日本外史』が如何にして中國へ渡ったのかを検討する。第四章は附論であり、日中の漢籍交流の代表的な例として、市河寛齋の『全唐詩逸』の西傳の過程を検討する。終章ではこの課題の學術的意義について総合的な分析を行う。

序章ではまず江戸末期の日本の僧侶月性の名作「將東遊題壁（將に東遊せんと壁に題す）」（「男兒立志出鄉關（男兒志を立て郷關を出づ）」）を挙げ、この詩が中國では長期に渡って毛澤東の作品であると誤認されていたことを指摘し、この誤傳の原因を考察し分析した後、これを契機として、歴史上の日本漢詩乃至漢文の西傳の軌跡を辿り始め、日本漢文學の中國への「逆輸入」という學術的課題を形成するに至るまでを述べる。

本論の第一章は、「間接交流の時期——江戸時代」である。江戸幕府が鎖國政策を実施してから、日本人は海外への渡航ができず、日中の文化交流は主に雙方の書籍の貿易および長崎を訪れた清朝の商人個人と日本の文人との交流に依存していた。本章ではまず長崎で發見された清の商人江芸閣と沈萍香の五十二通の書簡を證據とし、書簡の内容に對する考證を通して、頼山陽の『日本樂府』が迅速に中國へ傳わり、なおかつ錢泳等中國の文人から高い評價を受けることができた理由を明らかにした。それは清の商人が市場で購入してそのまま持ち歸ったという偶然の爲せる業ではなく、唐通事水野媚川が清の商人江芸閣、沈萍香に積極的に推薦して手を盡くした結果であり、そのねらいは、『吾妻鏡補』の作者にして日本研究の集大成者である翁廣平の推薦を受け、『日本樂府』を著名な『知不足齋

叢書』に収めることであった。この史實の解明は、ある側面から、当時の日本が文化的宗主國である中國に對し積極的に発信し、對等たることを求めたという歴史的動向を説明している。

次に、江戸時代の特殊な現象——唯一海外経験のある「漂流民」を例にとり、これら漢詩と無縁に見える普通の船乗りが、どのように日中漢詩交流の爲に特殊な貢献をしたかを考察する。福井地区の寶力丸の船乗りが遭難して上海に漂着した後、中國側の當地の官吏から贈詩を獲得しており、その後日本の關係する人士たちの和詩があり、そうした作品は『漂流人歸帆送別之詩』に編まれた。これらの作品の解讀を通し、江戸後期の「華夷」意識の變遷およびそれが日中文化交流史上に持つ意義を検討する。

第二章は「直接交流の時期——明治時代」である。明治維新によって鎖國が解かれ、日中の文人は相互に訪問し合うことができるようになり、日本漢詩の西傳も空前の盛況を迎えた。この時期は、更に二種類の状況に分けることが出来る。一種めは、中國の文人が來日し、明治の漢詩壇に様々な直接的な關係を持ち、その中から新鮮な體驗や變革への啓發を得たというものである。

一種めの状況について、まず清朝の初代駐日公使館參事官黃遵憲の日本漢詩の見聞歴を考察した。彼は中國の近代詩人のうち傑出した者として、『日本國志』や『日本雜事詩』の著作時に大量の日本漢詩を讀んで参考とし、また森春濤、森槐南父子や宮島誠一郎等、明治期の漢詩人と頻繁に交流しており、これらのことはいずれも、彼が明治時代に流行した「文明開化新詩」に相當の理解が有ったことを證明している。このため、彼が日本を離れイギリスで創作し廣く好評を得た「今別離」等の「新派詩」は、明治時代の「文明開化新詩」の影響を受けている可能性が高く、これは日中漢詩交流史上、それまでに無かった逆轉現象であり、注目に値する。彼が日本に滞在中には何故これら流行の作風に手を染めなかったのかと言えば、中華傳統文化の守護者として、當時保守派から傳統に叛くものであると見なされていた新詩の創作活動に介入し難かったことによるであろう。

次に、葉燁と陳曼壽の日本での文化活動を考察した。この二人のごく普通の中國文人は、來日後、明治漢詩人との詩歌交流を通して、日本漢詩に對し強い關心を持ち、日本漢詩集の編纂に着手した。葉燁の『扶桑驪唱集』には彼自身と日本の友人の唱和の作が収録されており、作者は計四四人、詩は一三七首である。『煮藥漫抄』は詩話の形式で彼と日本漢詩人との交流に関する逸話を記録している。陳曼壽の『日本同人詩選』に収録されている日本漢詩はより多く、作者は計六二人、詩は五九九首。これは中國人の編纂した初の日本漢詩選であり、日本漢詩の中國への「逆輸入」史上、重要な意義を持っている。陳曼壽が編纂したものは、やや後に出版された俞樾の『東瀛詩選』と比べると作品量、知名度、影響力共に比べ物にならないが、現地で収集した獨自の特色は、やはり賞賛に値する。

更に梁啓超と明治時代の「漢詩改革」の關係を考察した。梁啓超は清末の「詩界革命」の提唱者であるが、この中國三千年の詩歌史の最後のひと調べとなった文學運動は、日本とどのような關係があったのだろうか。この問題について、未だ探求した者はいない。梁

啓超は一八九八年戊戌變法に失敗して日本に亡命し、一八九九年十二月に「詩界革命」の提議を行い、漢詩の中で西洋文明を吸収した新しい内容を表現し、「和製漢語」に現れる新しい語彙を用いることを主張した。實のところ彼が來日する以前、明治時代の漢詩壇には既に「漢詩改革」に関する議論が多くあり、その獨創的で型破りな主張は梁啓超のものと非常によく似ており、具體的な創作上の実践としては、同じく「詩界革命」の重要な参加者であった黃遵憲が見た明治期の「文明開化新詩」があった。このような背景のもと、梁啓超はこのような漢詩の新しい潮流の影響を受け、「詩界革命」の發想を生み出した可能性が高い。彼がどこから啓發を受けたのかを何故明言しなかったかと言えば、中國文人の自尊心に起因し、日本の漢詩に學んだと語るのを恥じたからであろう。彼自身の言葉で言うならば、つまり「中國文學の名譽」を守る爲である。

二種めの状況は、中國の文人が來日はせず、本土において日本漢詩と接觸したというものである。これは最も厳格な意味での日本漢詩の「逆輸入」と言えるかも知れない。最初に、俞樾の編纂した『東瀛詩選』について考察した。この書には計五四八人の作者の五二九七首の詩を収め、中國人の編纂した最も規模が大きく、かつ最も著名な日本漢詩の選集である。俞樾は何故この書を編纂したのか。どのように編纂し、如何なる特色があるのか。版刻はどのように行われ、出版後の實際の影響はどうだったのか。この重要な典籍に纏わる上記のような基本的な問題について、これまでの研究は詳細を盡くしていない。よって金澤常福寺所藏の岸田吟香の書簡等の一次資料を手がかりとして、全面的に深く検討を行った。

次に潘飛聲撰著の『在山泉詩話』について考察した。中國の詩話類の著作の中で日本漢詩への言及が最も多いものとして、本書を推すべきだろう。書中には潘飛聲が様々な異なる道筋を通して、或いは日本漢詩人と接觸し、或いは日本漢詩作品を見聞して感じる所があった事が記述されており、中でも彼がドイツのベルリンで教鞭を執っていた時期の井上哲次郎、金井秋蘋との付き合いおよび漢詩のやり取りは、日中の文人の第三國での漢詩交流であり、異郷での美談と言ってよい。

更に李長榮の編纂した『海東唱酬集』について考察した。李長榮は廣東に居ながら明治期の漢詩人と多く交流を持ち、彼らが海を隔てて應酬した作品が、李長榮によって『海東唱酬集』として編まれ、日中漢詩交流史上最初の、雙方の唱和作品のみを専らに収めた詩集となった。彼は訪日を計畫したが突然の逝去によって成し得ず、『海東詩話』が撰著を計畫されながら未完成に終わったことは、日中の文壇にとって残念な出來事となった。

第三章では頼山陽の『日本外史』を例として、日本漢文の中國における流布について検討した。『日本外史』は上海を訪問した船員が携帯していたことや、北京に駐在した使節の贈り物、市場での書籍販賣など、様々な方法で中國に流入し、廣州、上海で重刻再版され、相當に廣い反響を得た。上海の文人錢懋がこの書の再版のために作った一七三三條の講評、杭州の文人譚獻がこの書に對し繰り返し行った評議、そして黃遵憲『日本國志』や王先謙『日本源流考』が撰著時にこの書を大量に引用し参考とした事、全てがこの書の中

國での影響の廣さと深さを物語っている。『日本外史』は當時中國で最も廣く流通し、讀者の最も多い日本漢籍であり、賴山陽はその優美で流暢な文章により、一度などは中國の文人と誤認された事さえあった。

第四章は附論として、市河寛齋『全唐詩逸』の西傳過程を考察した。清代康熙年間に『全唐詩』が世に出てから、最も早くそれに對し補遺を行ったのが、江戸の文人市河寛齋であった。彼は日本および朝鮮の漢籍の中から、詩七二首、殘句二七九句の『全唐詩』に未收の作品を収集した。このように所謂「域外漢籍」を用いて中國の典籍の補遺を行うという文獻整理は、日中漢籍交流史上、創造的な意義が有り、また編纂者が着手時點から中國へ傳えたいという意志を持ち、數十年を経た後ついに願いを果たしたというドラマチックな故事は、尚更佳話となった。

終章では日本漢文學の西傳の文化的な意義を總括し、この種の「逆輸入」現象が、日中文化交流史について言えば本と末、強と弱の關係の中で起こる雙方向の影響を體現し、中國人の日本認識について言えば、肯定的な認知價值を持ち、近代中國の文學革新について言えば、啓發と促進の積極的作用を引き起こしたことを指摘する。